

長く感じたテスト期間が終わり、もうすぐ夏休みに入ろうとしているその日。僕と堀村さんは、クラスを代表し、クラスメイトの水田君のお見舞いに行くこととなった。

水田君は脱皮のため、先週から入院している。

水田君は、性格や行動面で目立つような生徒ではない。ひよろりとした体躯に日焼けしにくそうな肌。文化系男子の典型的な容姿と、はにかむような笑いが少し印象的な子だ。控えめに見えて、男子の中に混ざればごく普通に下ネタにも対応するし、ふざけて取っ組み合いもする。そういう意味でもごく普通な子だった。けれど、ある特質によって、彼の名前はほぼ学校中に知れ渡っている。

サンショウウオ

そんな水田君が先週から入院していることを聞かされたのは、テストが終わってすぐ、担任からだった。

「少し脱皮がしづらかったようで、大事をとって一週間ほど入院するそうです。ただ、終業式には間に合わないの、夏休み期間に入る前に、誰か水田君のお見舞いに行つて、プリントを届けてきてもらえませんか？」

そう言つて教室を見回した先生に、僕と堀村さんはお互いに顔を見合わせた。

まあ、こつこつというときのためにいるのが学級委員だろう。僕らは黙つて手を上げた。

「こんにちは」

「こんにちは、水田君」

病室の引き戸を開けると、ベッドに座つて外を見てい

た水田君が振り返つた。そして、あの彼らしい表情で微笑む。

「いらつしやい、二人とも。わざわざごめんね」

彼の病室は個室で、彼以外誰も居なかつた。小さなキツチンもついている辺り、結構豪華な個室なのだろう。彼のお家の経済事情を邪推しながら、僕らは勧められるままに丸椅子に腰を下ろした。

「はい、これプリントとか。置いてくね」

真つ先にベッドサイドの机に書類の束を置いた堀村さんは、僕より仕事ができる。しかし、水田君はその様子に礼を言いつつ顔を引きつらせた。

「ありがとう、結構宿題あるね。うわーいやだ、僕、期末テストも追試なのに」

「追試させてもらえるんだ。それはそれでめんどくさいけど、よかつたね」

「うん、難易度は上がるだろうけど」

「勉強できる時間が増えるんだから、いいんじゃない？」

成績優秀な堀村さんの言葉に、僕らは首をすくめた。準備期間がのびたからと言つて、それを勉強時間にあてられるとは限らないのである。

「お茶でも出すからゆつくりしていつて。退屈してたから話し相手はほしかつたんだ」

わざわざベッドから立ち、棚から湯飲みを取り出そうとしてくれる水田君を僕は手伝つた。

「ご家族の方は、お見舞いに来ないの？」

「……いやあ、皆くねくねしてるから。なかなか病院まで着かないんだよ」

本当なのか嘘なのかわからない言葉でニヤツと笑つて見せた水田君を、僕は初めて蛇らしいと思つた。

水田君は蛇の血を引いている。そう聞いたのは、入学してから1ヶ月ほど経って、本人から。それまで、誰も彼が純人間でないことには気づいてなかった。

「まあ、隣のクラスの山根君も熊の家系らしいし、そんなに珍しいことでもないよね」

「多様化ってやつだ」

「ダイバーシティだっけ」

知ったような言葉を言いながら笑い合った僕らに、水田君も笑っていた。

「山根君ね、たまに話すよ。なんか親近感わいてさ」

「やっぱりそういうもんなんだ」

「うん。でも、僕より大分大変そうだよ。僕は、何年かに一回脱皮するくらいしか影響ないけどさ、山根君は毎年冬眠しなきゃいけないんだって」

「ええー、それはめんどい」

「でも、目一杯寝れるって羨ましい」

「確かに。休みの日は布団から永遠に出たくない」

「俺、熊向いてるかも。十六時間ぐらいい寝てるときあるから」

「マジかよ」

僕らの馬鹿らしい話にも、水田君は変わらさず笑っていた。

「体調はどう？ 痛いところとかないの？」

三人で緑茶をすすりながら、堀村さんは水田君に聞いた。水田君の病衣に包まれた肌は、少しつるつるとしているように見えるが、それ以外は特に変わりがないようだった。先ほどもごく普通に立ち歩いていした。

「うん。普段は家で脱皮するんだけどね。今回はお腹の辺りでそれが止まっちゃって……。皮下組織を傷つけることもあるからって、一応入院したんだ」

「へえ、大変だねえ」

「まあ、少し面倒だけど体質だからね。それよりも脱皮前の絶食の方が、毎度つらいんだ」

「絶食するんだ」

「うん。四、五日くらい」

「食べ盛りの男子学生にそれは酷だ。」

「おかげでまだお粥。退院したら、真っ先にケンタッキーが食べたいよ」

「丸呑みするわけ？」

堀村さんの遠慮ない言葉に、僕は少しひやりとした。彼女はたまにこういう大胆なところがある。僕の心配をよそに、水田君は笑った。

「いいね。あの骨ぐらいなら、消化できる気がする」

水田君は、こうした自分の体質に対する冗談をいつも楽しそうに受け止める。

僕らはもう高校生で、多少の分別はあるから、度が過ぎた冗談は当然控える。それはどんな仲間内の会話でも変わらない。それに、このご時世、体質のことを変に言及することはむしろタブーだ。そんなギリギリの範疇で行われる軽口の応酬に、水田君はいつだっていやな顔はしなかった。

「蛇信仰つていうのがあるんだよね」

ぼつりと呟いた水田君は、僕らが持ってきたお見舞いの品として持ってきたマドレーヌを手の中で転がしていた。残念ながら、食事制限がある今はまだ食べられないらしい。配慮が足りないこのお土産は、もちろん堀村さんではなく僕が持参したものである。

「へえ、珍しいね。日本の話？」

「私は少し聞いたことがあるな。白蛇は神の使いとか、そういうやつでしょ？」

さすが、堀村さん、物知り。

「そうそう。でさ、これお供え物だしたら、二人は蛇神様にお参りしたことになるなあ、なんて」

笑みを浮かべる水田君の瞳に、妙な気迫が感じられて、僕はぞくりとした。糸のように細められる目が、まるで獲物を捕らえているような。パツカリ開いた口から、今にも長い舌のびてきそうなの。

「へえ、じゃあ、大学受験合格でも願っておこうかな」

「それはむしろ僕がかなえてほしい案件だ」

涼しい顔で受け流す堀村さんに、水田君はまた普段通りに笑う。

彼を蛇らしいと思ったのは、これが二度目だった。

「水田君、元氣そうでよかったね」

「そうだね。なんか肌もきれいになってたし」

日が傾いてオレンジ色に染まるアスファルトを踏みしめて、僕らは帰路についていた。

「なんかさ、これ、別に水田君が嫌いとかそういうわけじゃないんだけど」

「え、何？」

らしくなく前置きをすると、堀村さんは淡々と言った。

「水田君て、少し怖いときあるよね」

「……ああ、うん、そう、かもね」

堀村さんの意外な発言に、僕は少し間を開けて曖昧な返事を返した。

「……私がおほんの少しだけ、蛙の血を引いてるから」

なのかなあ」

「え、そうなの!!」

「うん、ひいひいひいおばあちゃんくらい、前の話だけ  
ど」

意外な事実に見え張ると、堀村さんはいたずらっぽ  
く笑った。

「実は、舌をめちゃくちゃ長く伸ばせる」

「マジで!!」

「嘘」

「どっち!!」

僕の反応に笑い声をあげる堀村さんは、先ほどの水田  
君と同じような顔をしていた。